

【353】

氏 名（国籍）	李 ^り 常 ^{じょう} 慶 ^{けい} （中 国）
学 位 の 種 類	博 士（図書館情報学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2240 号
学位授与年月日	平成 18 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	図書館情報メディア研究科
学 位 論 文 題 目	『四庫全書』の刊行およびその文化的意味に関する研究

主 査	筑波大学教授	山 本 順 一
副 査	筑波大学教授	寺 田 光 孝
副 査	筑波大学教授	松 本 浩 一
副 査	筑波大学教授	植 松 貞 夫
副 査	明治大学教授	阪 田 蓉 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、春秋戦国時代から清朝前期に及ぶ学術、思想、文化をカバーする中国最大の漢籍叢書である「四庫全書」を研究の対象とし、その刊行、続修、影印、デジタル化等について検討を加えている。清の乾隆帝が 1741 年に発した勅命により取組まれた壮大な一大文化事業で、1772 年から本格的に開始され、360 人の編纂者と 3,800 人の筆写者が投入され、1781 年に完成をみた。全体は 3,400 余種、79,000 巻に達する。

「1. 序論」は、当然ではあるが、本研究全体の導入部で、「四庫全書」刊行の経緯と周辺事情を略述し、先行研究を振り返ったうえで、研究の意図を明らかにしている。著者の問題意識には、インターネット等の情報通信基盤の整備により欧米主体の価値観の浸透に対する中国固有の歴史認識に立つ中国の「国学」に依拠しようとする近年の中国市民の認識がある。また、本論文で用いられる基本的な用語についてもここで確認している。

「2. 「四庫全書」の編纂および刊行」は、それまでの中国の文化的伝統を背景に清朝初期の安定した統治状況により生み出された。「四庫全書館」という新たに設けられた行政機関が組織的に編纂事業を推進した。必ずしも国家事業として円滑に進捗したわけではなく、論文中には詳細な内訳が示されているが、地方機関の貢献を示す「各省采進本」が多くを占めた。また、「四庫全書」の問題点として一般に指摘されてきた検閲、禁書、焚書もこの編纂過程で行なわれた。ダイジェスト版の「四庫全書薈要」等も作られた。18 年を要して 7 部完成した「四庫全書」は「北四閣」「南三閣」に蔵されたが、その後の戦乱で現存は 4 部にとどまる。

「四庫全書」編纂の副産物である解題目録「四庫全書総目提要」（200 巻）作成の発意と沿革について書かれたのが「3. 「四庫全書総目提要」の編纂刊行」である。この「四庫全書総目提要」は「経・史・子・集」という中国の古典籍分類のスタンダードや目録記述について、大きな影響を及ぼしている。

「4. 「四庫全書」の影印刊行」は、20 世紀に入ってから影印刊行事業について論じている。編纂された「四庫全書」には少なからず問題があるが、先行する「永樂大典」を乗り越えて古代からの文献を保持してきた意義は小さくなく、重複投資との誇りには理由があるとしても影印版のその普及に果たした役割は大きい。1986 年には、ついに台湾で「四庫全書」の全書の影印が実現し、1987 年以降中国大陆でも「四庫全書」

の全体が影印刊行されるに至った。

「5. 四庫全書」の続修および四庫関連叢書の刊行」は、「四庫全書」の続修に向けての動きの歴史的背景を明らかにし、禁書の欠の補填、改竄の修訂、未収録とされた小説の収録などを埋めた「続修四庫全書」「四庫全書存目叢書」「四庫禁毀書叢刊」等の刊行実現と問題点を論じている。本章では、当時の日本政府が義和団賠償金を使って‘対支文化事業’として日中共同で設置された東方文化事業総委員会による「続修四庫全書提要」の編纂についてもふれられている。

「6. 古典籍の整理と利用および「四庫全書」のデジタル化」は、膨大な古典籍を擁している中国が取り組んでいるいくつかの「四庫全書」のデジタル化の概要を検討し、それがもつ中国古典籍研究に対して新たな地平を切り拓く意義をもつことを論じている。中国はインターネット上にも古典籍の利用を開放しようとしている。

結章である「7. 「四庫全書」の文化的意義」は、それまでの諸章での検討を踏まえ、豊かな歴史と伝統の結晶ともいえる「四庫全書」の将来の研究に拓がる文化的意義を確認しようとしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本学位論文は、一見すると、淡々と事実を羅列し、それに関連するコメントを展開しているように見える。しかし、これまで日本においても、中国においても、各王朝において権力的に進められた大型類書・叢書の系譜を踏まえて、「四庫全書」に関して編纂の契機から刊行、続修、影印、デジタル化までの全体を視野に入れた体系的研究はほとんど見られない。当審査において、本論文はこの点で積極的な評価を得た。李常慶氏は、本学位論文作成に際し、北京国家図書館、北京大学図書館等で新たな関連資料を発掘し、それらを整理し、そこで得られた知見をこの学位論文に盛り込んでいる。具体的には、たとえば民国時代の1919年に書かれた金梁の「上徐菊師請印「四庫全書」方法書」の発見で、それは財政的困窮の中で「四庫全書」の影印刊行の方策を提案していた。もっとも、それは実現するところとはならなかった。1923年に制定された日本の「対支文化事業特別会計法」にもとづく日中両政府で進められた「四庫全書」の影印プロジェクトについても探索した資料にもとづいて論じている。この点にも、本研究の新規性が見られる。

1980年代以降の台湾での影印刊行に向けての強力な動きとその実現、そしてそれに呼応する形で進行した大陸での影印事業の展開などについてもいねいに追いかけている。第6章では、最近の国をあげての中国古典籍のデジタル化の動きの先鞭をつけた重複投資とも見える「四庫全書」のデジタル化について詳細に論じている。

「四庫全書」の編纂に対しては、従来から学者や文化人の間で否定的評価と肯定的評価が錯綜しているが、これらについて一定の整理を施したのも本論文の功績のひとつである。また、これまで「四庫全書」の文化的意義というものについて正面から議論されることは少なかったようであるが、李常慶氏は、結論にあたる第7章において、‘知の集積’という観点を持ち出して、論理実証性に関してはいささか問題がないわけではないが、「四庫全書」の文化的意義について一定の見解を披瀝している。

この論文は、インターネット大国のひとつ、中国において氾濫する欧米文化とその強大な影響のなかで、中国固有の‘国学’が大いに見直され、中国の初等中等教育に古典が導入され、国民一般に經典読書が奨励される現今、大きな意義をもつように思われる。

「日本図書館情報学会誌」「情報メディア研究」に掲載された査読付学術論文3本を核とし、これまでの日本語と中国語で書かれた多数の関係論文の蓄積を背景に書かれたこの学位論文には学位授与に価する一定程度の独創性を認めることが出来る。

よって、著者は博士（図書館情報学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。